慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	浜野文庫善本略解題(四)
Sub Title	
Author	大沼, 晴暉(Onuma, Haruki)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	1992
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.27 (1992.) ,p.411- 440
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	資料紹介
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-00000027-0411

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

資料紹介

浜野文庫善本略解題 (四)

大沼晴暉

例言

一、本稿は浜野文庫善本のうち、二の函架番号が附される古抄本二点、三の函架番号が附される古刊本・古活字本九点、四の函架番号が附される稀覯本の中から、第一五迄を取上げ、略解を加えたものである。

一、解題は、表紙・見返・扉・前附・本文巻頭・版式或いは書写の体式・尾題・後附・刊記又は奥書・表紙扉裏表紙等を除いた墨附丁数・修補・旧蔵印等の諸事項を、ほぼ此順で略述した。しかし説明の便宜上、必ずしも序次にはこだわらない。また修補の単なる虫損直しの場合、同じく修補時に挿入した新補遊紙の類は一々明記しなかった。

一、本稿は形態学的な事項を主とし、内容には立入らない。また著者や当該書については、人名辞書や索引・伝記・解題書・研究書類の備わるものが多く、略記するに止めた。本稿は

各専門家の精査を俟つためのもので、その呼水となれば幸である。

一、使用字体は通行体を原則とし、一部旧体・別体字を残した。また引用文は、原文の句読は残したが、訓点・送仮名の類は印刷の都合上、殆ど省略に従った。

一、標目に又とあるのは前項と同版であることを示す。尚同版本に於ては著者事項以下同一の場合は記載を省略した。

一、本略解題は折を見て、随時継続発表の予定である。お気づきの点を何なりとお知らせ頂ければ幸甚である。

附記　本稿と原本との照合校正等について、私の斯道文庫講座に参加せる学生諸氏の協力を得た。記して感謝の意を表する。

二　古抄本

長恨歌伝・長恨歌・琵琶引・野馬台詩附源義経〔腰越状〕・手習学文之叟　唐陳鴻（歌・引）唐白居易撰　欠名者注（詩）旧題梁釈宝誌撰　日本欠名者注并序・起（附）源義経（手）釈文覚〔室町末〕写（釈雪心）半一冊

後補黒色表紙（二五・六×一八・六五糎）。副葉子に書入注あり。巻頭「長恨歌伝　前進士陳鴻撰」と題署す。単辺（一八・三×一四・二糎）有界九行の烏糸欄を設け、上層に高四・三糎の辺欄を施す。なお折山の版心部は、上部辺欄は表裏連接するも、下辺は墨が引かれていない。行二〇字に書写され、墨筆の訓点・送仮名・訓仮名、朱の句点・鉤点また朱引が施されている。行間・上層・欄脚に多くナリ式の仮名注が周密に書入られている。尾題なし。

第四丁裏末行より「長恨歌并序（朱書・注記省略　以下同じ）」を冠せ、「長恨歌　白楽天」を収む。尾題「長恨歌終」。第九丁表第四行より「琵琶引并序」を冠せ、「琵琶引」。引に「又ハ作行也」の注記あり。尾題「琵琶引終」。第一二丁より「野馬台詩序」を冠せ、「野馬台詩」。詩本文は無辺無界半葉の中央に、小字で一二行一〇字に書写され、訓み様を連合符にて示す。本作以下朱筆書入なし。尾題「野馬台終」。末に無辺無界小字双行にて「野馬台之起」を書す。

第一七丁より「源義経／乍恐申上候意趣者……／元暦弐年六月日　源義経／進上　大膳大夫殿」と題する書状を書写す。単辺無界九行二〇字、一行を隔てて第一八丁裏第五行より「手習

学文之叀　文学上人（ママ）」と題署す。単辺無界九行字数不等。末に「手習学文巻了　蓬莱野侶雪心書写之」とあり。巻末の副葉子に「玄宗皇帝……」等注記あり、その見返に「猿投山／深識之」の取得識語がある。本文一九丁。前副葉子に「常光／禅院」朱印押捺さる。総裏打。

白楽天の長恨歌・琵琶行は、平安朝以来搢紳の治政を含めた教養の書として愛好され、秦中吟・新楽府と共に古抄本の伝来が多い。これに唐陳鴻の長恨歌伝・梁の釈宝誌の作と伝えられる野馬台詩を合せ写したものも、室町写本だけでも五指を下らない。慶長勅版の「長恨歌伝・長恨歌・琵琶行」から、「野馬台」を併せ刊行した古活字版六種、その覆刻たる寛永整版本以下、陸続と印行覆刻された。さらに清原宣賢の講釈による「長恨歌抄」も、慶長期に古活字で印行され、四種、その覆刻整版本等が知られる。室町から江戸初にかけての時代の要請と嗜好が偲ばれる。こうした動きは次いで出版される「歌行詩諺解」等へと繋っていく。

室町時代には本書の講筵が搢紳縉流の間に設けられること多く、本書もそうした折のこぼれ種の一であろう。取得識語に云う猿投山は中古・中世にかけ真福寺と共に一の文化圏を形作っていた所で、古写本を蔵すること極めて多く、白氏文集の古写本だけでも、零巻ではあるが、鎌倉末南北朝・貞治二・貞治六・観応三並びに文和二年の四本が数えられる。

巻末の腰越状と手習学文之叀は、前記諸作と比すに懸隔を感じるが、往来物的関心から、やはり俗ながら教養の一斑を荷ったに相異なく、当時の混沌知の世界を窺うべきであろう。

「野馬台詩序」題下の双行注に「○……山門／玄恵法師抄ヲ作也又虎関注ヲ作□卜云也序亦虎関作也」とある。また「琵琶引」の尾題下にはこれも双行で「去程ニ日本ヨリ使ノ舟ノ額ハ進貢舩トウッシ官物馬太刀扇子也扇／三本也画ハ一本ハ冨士山一本ハ志賀一本ハ箱崎松原也」等ある。以て当時講釈の面影を偲ぶ縁となる。ハ〇九―二―一―一

附音増広古注蒙求存巻下　〔唐李瀚〕撰並注　後人刪補

〔室町後期〕写　大一冊　交漉紙

後補渋引茶色表紙（二七・五×一九・〇糎）貼題簽に「蒙求下巻」、表紙右肩貼紙に「奈須家珍七十」と書し、「久昌院／蔵書」の陰刻朱印押捺さる。表紙は反古紙使用。副葉子あって、扉「蒙求下」と書し、副葉子に前記朱印鈐さる。巻頭「附音増広古注蒙求巻下（朱引あり）」と題す。単辺（二〇・六×一四・

四糎）有界八行の烏糸欄を設け、行二〇字小字双行。上層に高四・四五糎の辺欄を施す。折山の版心部は表裏連接せず別郭。墨筆にて訓点・送仮名・訓仮名・連合符、朱筆句点・朱引あり。上層・行間・欄脚に朱墨両筆にて、一部ナリ式、殆どがゾ式の（処子ハ女カヲツトモタヌヲ云ソ　儒子男ノメモタヌヲ云ソ）仮名注の書入が為されている。やや薄墨の書入もあるが、同筆と見て可ならむ。尾題「附音増広古註蒙求巻之下（朱引あり）」。裏表紙見返に「右蒙求古写本一巻徐状元補注所謂／旧註者也白圭雖欠美質不亡／豈可不珍襲乎／玄盍子題」と書し、「奈須／恒徳」の朱印を鈐す。全二二丁。巻頭に「映文」朱印押捺さる。

蒙求は本家本元の漢土より寧ろ朝鮮・日本に於て、唐土理会のための童蒙初学の教科書として愛誦された。古くは平安写本を初めとし、宋徐子光注の「標題徐状元補註蒙求」を含めて、各種古抄本が伝存する。単行の刊本も、徐子光注本が文禄五年小瀬甫庵により古活字で印行されてより、各種の版がある。室町期には徐子光注本を基に、大儒清原宣賢の講釈が行われ、写本の他江戸期に入ると古活字で印行され、覆刻の附訓寛永整版本も刊行されている。

また蒙求は宋胡元質注胡曾詩（詠史詩）・五代李暹注千字文と合せ、李瀚注本が「三註」と呼ばれ、宋末から明初にかけ流行、故事・歴史・文字を知る唐土理会の第一書として、李朝や本邦中世にも愛好珍重され、刊写により江戸初期迄大いに流行した。

八〇九―二―二―一

三　古刊本・古活字本

説文解字韻譜五巻（存巻三―五）〔五代徐鍇〕〔李朝初期〕刊〔修〕特大一冊　覆〔元延祐三年種善堂〕刊本

丁子色朝鮮表紙（二八・七×一七・八糎）に直に「説文解字二」と書さる。中央に大字にて「張　成字函」と千字文函号が書かれ、右下綴尋部分に「共二」とあり。巻頭「説文解字韻譜上（去・入）声巻第三上（四・五）／葷部一……范部五十五」と目録あって本文に連接する。巻三下は「説文解字韻譜上声巻三下」と題さる。双辺（二〇・九×一三・五糎）有界七行、篆字を五段に刻し、注小字双行、篆字は小字二字分、各行篆一字注二字計三字、五段分なれば毎行一五字。巻三上第一丁のみ版心

白口、双下向黒魚尾、上魚尾下に「∴」の標識、下魚尾下に丁附。以下小黒口双下向黒魚尾、上魚尾下に「篆匀幾」下魚尾下に丁附を刻す。尾題「説文解字篆韻譜巻第三上声」、但し上声は二重の墨囲中に陰刻で刻さる。巻四・五は上声等の記載なく、巻三下は「説文解字韻譜巻三」と題さる。巻三上二〇、下通三七（但し第二〇の丁附重丁）、巻四―三八（第二二丁欠）、巻五―三五丁。巻尾に「守／的」朱印、「絁／宗」墨印押捺。「講（講字欠画）部三」より、小題上に黒魚尾を設け標識とす。巻三第二六丁裏末行・同三四丁裏後第三行・巻四第一二丁表末行・巻五第二三丁裏末行等に墨格あり。本帙は原刻葉漫滅し、殆どが補刻である。まま眉上に韻目が標記書入されている。

裏表紙見返に「天正廿年（廿に引出線を引き「初渡之年也」と注記）壬辰三月朝鮮渡海／六月五日於朝鮮京城北大門通化門之内得之／為天得長物厝焉　天柱山　公用／天柱山用（朱筆）大樗究人恵雄誌之」の取得識語が記されている。

本版は、巻一―三を蔵する誠庵文庫目録によるに「丙辰菖節種善堂刊」の旧刊記を刻すと云う。恐らく元の延祐三年に繋けて考えられる「丙辰菖節／種善堂刊」の双辺木記を巻一末尾題前に有する本を、そのまま覆刻したものであろう。種善堂刊本は、台湾故宮博物院・北京図書館（二部）・北京大学等に存し、影印が台湾商務印書館の四部叢刊に、また故宮博物院蔵本の解題が「増訂中国訪書志」に収められている。宋元版の朝鮮による覆刻或いは翻印・翻刻は、その実数は不明ながら、かなりの数に上ろう。ハ〇九―三―一―一　（追記一）

中庸章句大全・大学章句大全　〔明胡広等〕奉勅撰〔李朝景宗時〕刊　銅活芸閣印書体字Ⅱ　特大一冊

後補縹色空押牡丹卍つなぎ表紙（三一・七×一九・一糎）、日本での改装。淳熙巳酉春三月戊申新安朱熹序「中庸章句序」三丁を冠せ、巻頭「中庸章句大全」と題さる。左右双辺（二一・三×一二・九五糎）有界一〇行二〇字。版心白口双花魚尾、下魚尾が版心下辺に置かれ、上魚尾下に「中庸　丁附」。尾題「中庸終」。四二丁。三二丁表第六行興字は切貼による印字訂正。

次に淳熙巳酉二月甲子新安朱熹序「大学章句序」三丁を冠せ、巻頭「大学章句大全」。版式・版心中庸に同じ。柱題「大学」。尾題「大学終」。二一丁。巻頭巻末に「尹謙／基印」「伯／温」の陰陽朱印二顆鈐さる。二重の墨囲中の陰文「輯註」は、二字連続の活字となっている。

本書には中庸の第二一丁表迄、墨藍の両筆で、また大学・序

にも所謂る懸吐が施され、書脳或いは版心に、一種の標目・見出しであろうか、書入が為されている。昭和五十年度、日本学術振興会の外国人招聘研究者として来日され、本文庫に於て日本所在漢籍朝鮮版の調査をされた沈暁俊氏の「日本訪書志」に、本帙の解題が収められている。ハ〇九—三—二

中庸私抄(尾題)存巻上　〔清原宣賢〕　〔元和七年一一月〕刊　(〔京　本屋二兵衛〕)　古活　大一冊

後補焦茶色覆表紙(二八・一×二〇・三糎)、原栗皮表紙ありて、裏貼りに「色欲箴」等を印する古活字版刷反古使用、裏表紙は同じく版心に「格致　五十三」と印する刷反古使用、双辺無界一二行一七字、小型活字使用。裏貼りのため左文字で比べにくいが、大阪府立図書館蔵元和古活字版「格致餘論」と同版、第一・二・五三丁の刷反古。巻頭「中庸私抄章句序」と題し、序の抄解より入る。単辺(二二・二×一六・六五糎)無界一三行二三字。版心小黒口双黒魚尾、中縫に「中抄上　丁附」。尾題「中庸私抄上終」。巻上は第一四章迄、全四三丁。経文は「某——」として摘録省記し、抄解を施す。文末は一格空きで追込まれている。朱点・朱引が僅に第二丁迄附される。

当時の片仮名交り本の活字は、漢字に比し片仮名のやや小振りなものが多いが、本版の活字は一齣が漢字片仮名共同じ大きさに作られている。またメ等の合字がある。本版は恐らく「古活字版之研究」に図の載る高林壮吉氏蔵本と同版であろう。該図によって下巻末の刊記を掲げておく。「于時元和七暦重光作噩仲冬吉辰／本屋／二兵衛　開板焉」。本書は単行か、大学私抄と合せ刊行されたものか未詳。

本書は刊本化のための後人の整斉編修を経てはいるが、室町後期の大儒清原宣賢の講釈に淵源する仮名抄と見て大過なかろう。宣賢の仮名抄については、阿部隆一氏に諸種の考証・解題が存する。ハ〇九—三—三—一

〔徒然草寿命院抄〕欠上冊二八段以下　〔秦宗巴〕(寿命院立安法印)　〔慶長〕刊　古活　大二冊　移写安永六年七月大久保忠寄書入秦家蔵著者手訂本

縹色表紙(二七・〇×二〇・二糎)貼題簽に「徒然草寿命院抄上(下)　慶長活字本(これのみ朱書・下にはなし)」と書さる。表紙は反古紙使用。見返貼紙に朱筆にて「慶長活字本二巻此書安永年間大久保忠寄寿命院家所／伝ノ原本ニヨリ校合朱点ヲ附セラレシモノニテ寿命院抄ノ正シキ書／ナレバ殊ニ珍トスベキ書也今明治庚子迄歳霜暦数三百年／共古書屋『山中氏／臧書(朱印)』」

の識語あり、山中共古（笑）の筆。「一　ッレ〳〵草ハ　吉田ノ兼好所作也……」の解題・「ト部系図」計二丁あって、内題なく「一　ッレ〳〵ナルマ、ニ日クラシ……」と直接本文に入る。単辺（二二・九×一七・六糎）無界一三行字数不等。版心小黒口双花魚尾、中縫に「徒然抄上（下）　丁附」。下冊は「花ハサカリニ月ハクマナキヲノミ……」に始まる。尾題なく、慶長第六辛丑孟冬九日　也足叟素然〔跋〕あり。素然に朱引し、「中院通勝卿号ニ也足ト法名素然慶長十五年庚戌／三月廿五日薨五十三歳」と朱書注記す。上冊存三三、下冊全四九丁。瓢型朱印「鳳鳴館」墨印「倉持氏印」が巻頭に鈐され、巻末には「源印／貞雄」「東都／処士」の陰陽二顆の朱印が捺されている。他に表紙見返の貼紙には、「韻鏡享禄板」と記せる書物型朱印「今日家／書乃天／下書也」、朱印「山中文庫」押捺。系図部分の吊書の現今のオモテ罫に当る罫線活字に、苦労している様子が窺われて面白い。なお川瀬一馬氏の「古活字版之研究」によると、本帙の欠佚部分が龍門文庫に存するようである。川瀬氏の云う無刊記第三種本。

本書は跋の後に、以下に記載する大久保忠寄と源滕賢の識語が存する。

大久保忠寄云今ノ秦寿命院悰俊ノ話ニ慶長六年秦寿命院立安法印字宗巴此鈔ヲ編集シテ／（抬頭一格）正親町院ニ献ス叡感アリテ中院権中納言通勝卿是ヲ書シ奥書シテ又立安ニ御製ヲ添テ給フ／（低一格）思ひいる心のおくの隠家にすますや山たよしあさくとも／此書今ニ秦寿命院悰俊ノ家ニ伝ル也是全書ヲ得テ校合シ誤字ヲ訂正シ本書仮名并点／有所ハ以レ朱附レ之尤本書ハ平仮名交リ也此書ハ活版故片仮名ヲ用ユル歟／　安永六年丁酉七月廿七日　藤原忠寄誌

右大久保氏御本乞需拝借シ令校合畢　安永九年庚子仲夏仲旬　源滕賢／謹誌（以上朱筆）

慶長九暦閼逢執除姑洗良辰／日東洛陽　如庵宗乾刊行（以上二行墨筆、朱筆による連合符・訓仮名・注記省略）活板ナリ（朱筆）

忠寄識語に云う如く、秦家に伝わった書、就中その基になった宗巴自筆稿本は、本文平仮名交り注解片仮名交りで書かれていたらしく、本書の初刊である慶長九年三月如庵宗乾古活字本は、第六丁迄平仮名表記が交りやや混乱している。

裏表紙見返には、更に以下の識語が存する。

忠寄追加（朱筆、以下墨筆。但し朱引・朱句点あるも省略）／

秦悰俊家書ノ文話ト少々違ヘリ左ノ如シ／徒然草の抄を叡覧被ㇾ遊て立安法印に下されし／　正親町上皇　御製／思ひ入るこゝろの奥のかくれ家にすますや山はよしあさくとも／此御製東陽集ニ有之也　東陽集ハ交野少府監作也右少府監ハ西洞院庶流／交野可真嫡子也／権現様御代従京都於駿府被召出御ヒ役相勤候／　寿命院法印秦立安字宗巴／慶長十二年丁未十二月十四日卒行年五十八歳西嵯峨鹿王禅院境内葬之／　立安法印所著書目／素問註鈔十巻医学的要方十五巻本艸序例鈔八巻参伍的法一巻／炮灸詳鑑一巻草藁　十巻　徒然草抄二巻一炷烟　一巻／　寄合医師／寿命院秦悰俊／字宗逸

本版は誤植が多く、特に上冊第一〇丁裏・一一丁表等に頻出し、これを自筆稿本に基づく秦家蔵の中院通勝写本によって朱訂している。また朱筆にて訓点・送仮名・訓仮名・朱引等が施されている。秦家蔵本は現所在が知られず、本書入は尊経閣文庫蔵の江戸初期写本（現在所蔵されず）と並んで、本書の原初形態を知る上に貴重である。

徒然草は伊勢物語に次いで、和書で最も版種の多い書物で、川瀬氏によると古活字で一七種、寿命院抄も七種を数える。整版本も本塾図書館に多数蔵するが、コレクションとして著名なのは、神奈川県立金沢文庫・富士見丘女子短期大学の小松操氏の蒐書で、共に目録が刊行されている。徒然草は啓蒙・教養・教訓の時流に投じ、その艶隠者的性格と相俟って近世初期大いに流行し、様々な模仿やパロディー作品を生んでいる。また本書は、仏書の注解を除けば、著者生前に刊行を見た極く初期の作品と云うことになる。序でながら寿命院抄最初の版である慶長九年三月如庵宗乾刊本は本塾図書館にも蔵し、此版は川瀬氏の解題を附し影印刊行されている。

大久保忠寄は、当時三河出の祖を同じくする旗本に、主計忠寄二〇〇俵、清右衛門忠寄二〇〇俵、八郎左衛門忠侈一〇〇〇石の三人がおり、特定できない。ハ〇九―三―四―二

〔徒然草寿命院抄〕存上冊　〔秦宗巴〕　〔慶長〕刊　古活　大一冊

後補焦茶色布目表紙（二七・八×二〇・一糎）に直に「徒然草　慶長活字　上」と書す。「一　ツレ〳〵草ハ　吉田ノ兼好所作也……」の解題・「ト部系図」計二丁あって「一　ツレ〳〵ナルマヽニ日クラシ硯ニムカヒテ……」とあること前に同じ。双辺（二二・七×一六・三糎）無界一一行字数不等。版心大黒口双花魚尾、中縫に「徒抄　丁附」。存一一六丁。百卅七段迄。

川瀬氏の云う無刊記第一種本。八〇九―三―五―一（追記二）

白氏文集七一巻（存巻一一―一五・二六―三五・四一―四五・五六―六五）唐白居易撰〔那波活所（道円）〕校〔元和四年七月跋〕刊（〔校者〕）古活　大七冊

後補紺色表紙（二八・一×一九・四糎）金切箔散しの双辺刷枠題簽に「白氏文集十一之十五（二十六之三十・三十一之三十五・四十一之四十五・五十六之五十八・五十九之六十一・六十二之六十五）」と書す。香色表紙に直に「白氏文集自十一至十五（自廿六至三十・自卅一至卅五・自四十一至四十五・自五十六至五十八・自五十九至六十一・自六十二至六十五）」と書され、双辺刷題簽「白氏文集六七八」一枚残存。第一冊に「横尾様／佐々木生」と書し、存巻を記した封筒はさみ込まる。巻頭「白氏文集巻第十一（―六十五）」と題さる。大題の次に目録あって本文に接続する。双辺（二三・〇×一六・五糎）有界九行一六字。版心大黒口双花魚尾、中縫に「白集幾　丁附」。尾題「白氏文集巻第十一（―六十五）」。但し巻一四は巻末末行下端に「巻尾」とあるのみ。巻一一―一〇、巻一二―一六、巻一三―一五、巻一四―一四、巻一五―一八、巻一六―一八、巻一七―一〇、巻一八―一三、巻一九―一六、巻三〇―一六、巻三一―一九（第一〇丁表後第二行から第一四丁表後第二行にかけ欠文あり）、巻三一―一三、巻三三―一三、巻三四―一九、巻三五―一四、巻四一―一一、巻四二―一七、巻四三―一六、巻四四―一六、巻四五―一三、巻五六―一六、巻五七―一四、巻五八―一四、巻五九―一九、巻六〇―一五、巻六一―三五、巻六二―一三、巻六三―一〇、巻六四―一六、巻六五―一〇丁。「野宮／書印」（朱印）「藍山求之」（墨印）押捺さる。匡郭上層に、版心部から書脳部にかけ、右向きに「安国蔵本」の墨印鈐さる。

本書は、京の儒者時習斎堀杏庵・大坂町奉行等を歴任せる賜蘆文庫新見正路・松方正義等の遞蔵せる、金沢文庫本等諸本との校合書入を有する本塾図書館蔵本等に徴するに、戊午秋七月丁亥朔那波道円書于洛中遠望台「白氏文集後序」があり、次掲本と共に、紀州藩の儒者那波活所の校刊になることが知られる。本版のテクストは恐らく朝鮮の成化二一年鑄字跋本に基づくものと思われる。藤本幸夫氏等による詳細な考証が、近刊予定の白居易研究講座に於て為される筈である。四部叢刊に影印されているが、誤植箇所等一部に手が加えられているようである。或いは底本に為されていた訂正を、そのまま影印したものであろうか。胡粉等で塗抹し、巧みに墨書したり補筆したりすると、

影印では殆ど区別できないので、影印本を底本とする場合には餘程注意する必要がある。

那波活所刊行の古活字本には、下象鼻大黒口に中央の欠損した特徴的なものが見られ、頻出する。今試みにその出現箇所を記せば、巻一二―一八・二〇・二二・二四・二六丁、巻一三―一・三・四・五・六・七・八・一〇・一一・一三丁、巻一四―一五・一七・一九・二一・二三丁、巻二九―六・八丁、巻三〇―二〇丁、巻三一―四・六・八・一〇・一一・一三・一五・一八丁、巻五六―一・三・五・七・一〇・一三丁、巻六二―一五・一七・一九・二一丁、巻六三―二・四・六・八・一〇・一二・一四・一六・一八・二〇丁、巻六四―二・三・五・七・八・一〇丁、巻六五―一五・一七・一九丁。いささか煩瑣であるが、浜野文庫欠佚部分も、本塾図書館本によって識せば、巻一―二六丁、巻三―二・六・七・一〇丁、巻四―一・三丁、巻二二―二丁、巻二三―二・四・五・六・七・一〇丁、巻二四―四・六・八・一〇・一二丁、巻三一―四・六・八・一〇・一一・一三・一八丁、巻三七―一・三・一〇・一三・一五・一六・一七・一八・一九・二〇・二一丁、巻三八―五・七・九・一〇・一一・一二・一三・一五・一七・一九・二一・二三・二四丁、巻三九―一・二・三・四・五・七・九・一一・一三・一五・一七・一九・二一・二三・二五・二七・二八・三〇・三二・三四・三六・三八丁、巻五五―一三・一六・一七・二〇・二三丁、巻六六―一・三・五・七・九・一一・一二・一四・一六・一八・二〇・二四・二六丁、巻六七―一・六・九・一二・一六丁、巻六八―八・一〇・一一・一三・一六・一八・二〇・二二・二三丁、巻六九―二・四・六・七・九・一一・一三・一五・一七・一九丁、巻七〇―六・八・一〇・一一・一二・一三・一五・一七丁、巻七一―一・四・六丁、後序―一丁。

すなわち巻二・五―一一・一五―二一・二五―二八・三二―三六・四〇―五四・五七―六一の四四巻分には該黒口は全く使用されていない訳である。こうしたことは案外に、古活字版製作現場の実態を我々に垣間見せてくれるのかも知れない。

白氏文集は、明暦三年明万暦刊の馬元調校本を覆刻した整版本が通行している。八〇九―三―六―七

倭名類聚鈔二〇巻　源順撰　那波〔活所〕(道円)校　元和三年一一月序刊（校者）　古活　大四冊

紺色表紙（二八・一×二〇・三糎）双辺刷枠題簽に「倭名鈔一（―四）」と書さる。元和三年丁巳冬十一月　日　羅浮散人

洗筆於雲母谿清処「題倭名鈔」三丁、番陽那波道円識「新刻倭名類聚鈔凡例」一丁、「倭名類聚鈔序」三丁を冠せ、巻頭「倭名類聚鈔巻第一（一―二十）源順撰（巻八・一三―一五は撰者を題さず）」と題署す。大題に次いで、目録をさしはさんで本文に接続する。双辺（二三・〇×一六・四糎）無界九行一六字小字双行。前記白氏文集と同活字使用。版心大黒口双花魚尾、中縫に「和名巻幾　丁附」。尾題「倭（巻九和）名類聚鈔巻第一（一―二十）」。巻一―一九、巻二―二一、巻三―二九、巻四―一八、巻五―二八丁―以上第一冊。巻六―三三、巻七―二五、巻八―二二、巻九―二四、巻一〇―一九丁―以上第二冊。巻一一―一九、巻一二―二八、巻一三―一八、巻一四―二一、巻一五―一七丁―以上第三冊。巻一六―二三、巻一七―二五、巻一八―二三、巻一九―二九、巻二〇―三三丁―以上第四冊。巻頭に「良／目」「櫟菴」「杣芝／之印」「路川／氏／蔵書」の朱印、巻末に「子燭」「可野」「梅／水」「良／目」「櫟菴」等の朱印が鈐さる。

本版にも前記白氏文集で掲げた黒口が見られる。煩を厭わず挙げれば、巻三―二三・二八丁、巻四―九・一二・一五・二七・二八丁、巻五―二七・二八丁、巻一〇―一七丁、巻一二―三・九・二一・二四丁、巻一六―二一丁、巻一七―二・九丁、巻一八―一四・一七丁、巻一九―二・八・一一・一四・一七・二〇・二三・二六・二九丁、巻二〇―三・一一・一七・二〇・二四・二七・三〇丁。すなわち本版に於ても巻一・二・六―九・一一・一三―一五の、全巻の丁度半数である一〇巻分が、この欠損黒口を使用していないことになる。本版には、また丈の低い黒口も見られる。

本版には川瀬氏の記す如く、誤植を訂正する以前の版（尊経閣文庫蔵）が存する。序第二丁裏第三行「私容」が「松容」と、塗抹の上、印字訂正（本版では差換え）されている。日本古典全集・諸本集成倭名類聚抄・勉誠社文庫等に影印本がある。

本書は、原序に醍醐帝の第四皇女のために撰進したことが見える。本版の翻刻である整版本二種九点については、本稿(二)に既出。ハ〇九―三―七―四

又存巻五―八　大一冊　書入本

布目地渋引刷毛目表紙（二八・八×二〇・三糎）に直に「和名鈔五之八」と墨書し、「水茎家／典籍印」朱印押捺さる。表紙右に「不出閫外」と書し、「職官／国郡」と目録外題を記す。右下に「水茎」朱印鈐さる。見返に近時の貼紙あり、「本書入／以文云三ヶ所真龍云一ヶ所／望之云一ヶ所本居氏云一ヶ所／あり以文。

は以テと略しても書／けり或は以文の書入れるあり／さらに／可尋」と。「天武十二年十二月遣……等巡行天下限分諸国之境堺而……」の書入一丁綴込まる。「いた／くす」の朱印押捺。眉上・行間に朱筆にて校字・訓仮名、また「武按」等の朱墨書入れ、「真珠云」の緑筆、押紙・綴加え・不審紙等が見られる。残存僅か四巻の零巻ではあるが、書入れは仲々稠密である。ハ○九—三—八—一

節用集(易林本)二巻　慶長二年刊〔修〕(京　平井休与)

大二冊

濃縹色表紙（二六・一×一八・六糎）に香色金切箔散し題簽を貼附するも、題されず。第一冊表紙右肩に「易林　活字板(以上朱書)／慶長版節用集」の貼紙あり。巻頭、魚尾を標識とし、その下、黒口状の中に、陰刻で「節用集（二重の墨囲中に、同じく陰刻で）伊」と題さる。丸い墨囲中に、陰刻で「乾坤」と標識し、「乾(イヌ井イカヅチ同)雷公雷電霹靂(イナビカリ同ライテン)」と本文に入る。単辺（二三・七×三六・一〈表裏通〉糎）無界七行字数不等小字双行。振仮名附。版心白口。「節用集上（下）丁附」を刻するのみ。巻下は大題なく、魚尾を標識とし、墨囲陰刻の「也」を以て標記し、本文に入る。巻下第七二丁裏、加刻された陰刻の双辺木記「洛陽七條寺内平井／勝左衛門休与開板」の次に

有レ客携(ヘテ)鉅巻(ヲ)一曰此(ノ)節用集十一字九(ハ)皆贋(ガン)也正(タ・セ)二諸／於韻会礼部韻(ニ)諾(セハ)則命(ノ)工(ニ)刻(セン)レ梓(シニ)焉如(キ)二愚夫(カ)一弄(シヤウ)／何辨(ソーセン)二字一画之誤(リヲ)一哉(ヤ)惟取(テ)二定家卿(ノ)仮名遣(ヲ)一分(チ)二書(ノ)伊／為越於江恵之六(ツヲ)隔一段(ニ)以(テ)返(ストヲ)レ之(ヲ)云皆慶長二酉易林誌

の原刊語あり。巻下第五四丁裏より「十幹(ジッカン)」第五八丁表より「分毫字様(ブンガウノシヤウ)」と陰刻し、各種便覧を載す。巻上六八丁、但し第四八・四九丁欠。第六八丁裏大墨格。巻下七二丁。巻頭に「読杜／艸堂」の寺田望南朱印鈐さる。第五丁表迄朱点・朱引あり、餘白・上層に種々の語彙が書入られているが、天地断裁され、一部裁切られている。

室町時代に成立し、種々の異本を派生・分出させながら発展した節用集は、室町末に二種の刊本を見、江戸期に入ってその極初に刊行されたのが改編本たる本書である。本版は、以後文字通り用を節する字書として、江戸期日常用語辞典の代名詞の如くなった何某節用集のその祖とも云うべきものである。

慶長二年の易林刊本は、大題や標識の陰刻箇所が全て本文同様陽刻となっており、平井休与修本では、本文にも数ヶ所の増補改修が加えられている。実用向きに、引き易く見易くするた

めの改編が加えられたのであろう。

なお本書には覆刻本が存し、易林初刊本・平井休与修印本・覆刻本の三種の校合表が「ビブリア」第一一号に収められている。本修印本は日本古典全集に影印され、また初刊本と修印本の巻頭・巻末は、川瀬氏の「日本書誌学之研究」—該項は初め雑誌「書誌学」所収—に掲載されている。

本書は、表紙に「活字板」と朱書されるが、版面古拙にして濃淡あり、ややぎくしゃくしている故の誤認で、勿論整版本である。当時は活字全盛の時代であったが、本書の如き辞典・字書は、啓蒙・教義の時代とてまことに需要多く、それは本印本の印面漫滅、版面のいかにも痩せた感じを思わせる後刷本の多いことからも証明せられる。活字版は目に一个字ある者には、素人でも組版ができ簡便であったが、何如んせん紙型法の開発されない当時としては、需要に応じて増刷すべき術がなかった。大部の書物を印刷するには、何台かの枠を使い何丁か分の組版を為し、刷っては崩し、また次の数丁を組みという、いわば自転車操業の繰返しだったのである。それが印刷場所や使われる活字の頻度を考えた場合、最も経済的且つ簡便な方法であった。その上本書の如くルビや異体字・別体字さらに訓点・挿絵等のことを考えると辞典・字書に何故古活字版が少いか、自ずと答が出よう。そしてまた、需要の大幅に拡大した次代に、訓点附きの和刻本を中心に整版全盛となる理由も、明らかであろう。片仮名交り書については、漢字とカナとで一齣の活字の大きさに大小があり、不揃いのものが多かったこと、平仮名交り書では、古来我国ではかなの連綿体に対する美意識が存し、一字宛切離されたかなに馴染の少かったことも影響しているかも知れない。ハ〇九—三—九—二

四　稀覯本

遺契一二巻　服〔部〕南郭(元喬)　写　半三冊　山東京山・千葉葛野旧蔵

砥粉色布目表紙（二三・八×一六・五糎）双辺刷枠題簽に「南郭随筆遺契全十二巻合為三本　巻上」「南郭随筆遺契　巻中(下)」と書さる。南郭散人服元喬南郭「題遺契」一丁、「遺契巻之一（巻二—十二、巻の字以下朱書）」の目録三丁を冠せ、内題「遺契」。無辺無界一一行二一、二字小字双行。字面高約一八・八糎。朱筆にて校字・書入・朱引を施し、引用文中の標題語に圏点を附す。

また藍筆にて句点・書入あり。不審紙・欄脚に附箋等あり。校訂上の書入や裕按・順按・禎按・子迪曰・鎮州曰等の按語が多い。第一冊巻一事一七丁・巻二言一六丁・巻三制（目録巻三―二・巻四―二丁）二六丁・巻四名二五丁・巻五―七丁（目録では「古人貴子」（以上四巻）／「自称字」（以下五巻（傍線部・傍記朱書））とあるも、本文は「古人貴子」より別丁となり、巻五とす。目録の題下に「古人貴子以下為五巻」とあり）。第二冊巻六詩（目録巻六―二・巻五―二・巻七―二丁）二三丁・巻五文二八丁・巻七文二―六丁・巻八物（目録二丁）二四丁。第三冊巻九物二（目録二丁）一九丁・巻一〇雑（目録巻一〇―二・巻一一―二・巻一二―一丁）二四丁・巻一一雑二二丁・巻一二異一五丁。巻二より巻頭の版心上部に当る折山に焦茶色の紙を貼り標識とす。巻九は目録に、巻一一・一二は目録箇所にも標識が為されている。「百樹園」「橿園」「回搗／園」「福田文庫」「掃葉山／房臧書」の各朱印押捺さる。

本書は巻末に以下の二則の題跋が識され、その伝流が判明する。長文であるが引録する。

題　跋

凡弥書伝写之冊。字々端清句々正謄。絶無誤謬。猶有巧妾而婦徳焉。嗟夫難哉矣。余嘗貯服子遷帳秘之抄遺契一帙。写字不俗更無謄誤。且有朱書縄削。恐是不出傭書一書生懇写歟。独愛為徳妾。不離机辺既三十余年矣。一日近隣蛍雪友。橿園主人来訪。見遺契云。嘗聞其名。未披巻。乞許一覧。而後月餘携来返之。謂余云。此書也。群籍之蒐輯。鴻儒之摘録。崑山拾玉植林折枝。将是作家之饒田著筆之芳沢也。欲我亦蔵一帙。索四方書肆。絶無所貯。是以欲計転写於傭書。雖然（此二字挿入符ありて傍記さる）賃筆徒多不識字。焉烏脱字。画虎類狗。無如之何已矣。懐。我家与翁隣衒。若蔵書急就之用同書架。冀翁出遺契。聴合巻於我。聊納業燭之聘。懇求不啻焉。余謂。子遷叙遺契曰。余今行年踰七十。耄矣愈忘。餘生無幾。胡用此物為。云々。余今行年八十二。子遷之語以可味。且為学友争惜一書。乃下架嫁之。雖然為徳妾不離机辺三十余年。頗有流水之心。拍冊曰。遺契々々勿忘旧主。園主抃躍携冊去矣。書事以題巻後。益応園主之乞耳。

嘉永三年庚戌小春月廿五日

時年八十二老筆慳拙

京山人百樹㊞（京山人）

再　跋

此書はれかもたるを橿園の翁千葉葛野ぬしへおくりしよしは前にいへりしからさまの文につはらなりさかりて六とせすきにしことしむ月はつかの日翁和哥のよみ初てふまとゐしてわれも若々しき哥の友にかつまへられつ翁のをしへ子らもうちましりて哥よみかはしたるに翁つとめてかりそめのなやみにうちふしつるに日をかへおもりかちにてくすしかはる〳〵ちからをつくしつるにかひなくてつひにやよひ七日の月になん身まかりぬ家の太郎をはしめ物よむ人なけれは翁かこゝろもたるふみともあはれふみやにとらすと聞て此書もしからんはいと〳〵をしくて翁かかの業燭の聘を返して再わかもとへかへらる斗り今はたみるにも学の友のなつかしくてかくなん

ふみの名は遺す契のもしなれはかゝるあはれのつまとなりけん

安政二年己卯水無月二月

八十七歳京山人百樹

やや老筆震えを帯び、切々と書写され、江戸の隣人隣組の様子と文化圏の有様が活写されている。ふみやに払われていれば、また違った途をたどったでもあろうか。

京山人百樹、安政五年没、享年九十二。京伝の実弟であるが、本題跋からも知られる通り真面目に過ぎて、戯作者としては大成しなかった。しかし鈴木牧之を輔け、北越雪譜をよく編修刊行せしめたことは記憶されてよい。

本書は、京山人の題跋にも引くが、自序に

余才疎。不足人師。即恒読書。素有広覧四方之好。……於是随所遇而抄録焉。間亦所恒一二急就附於其中。凡以備私記。左右取之。積年累帖。若成書然。……然則我存書存。我亡書亡。余今行年踰七十。耄矣愈忘。餘生無幾。…我躬将化。遑恤我後。焚之亦可。遺之亦可。……然既是遺契而已。姑録其言。令後之拾者。知千万無益於他人之富爾。

とある如く、随読随抄の備忘録で、孫引を得意とする戯作者にあっては、京山ならずとも「将是作家之饒田著筆之芳沢」であったに違いない。

内容をしのぶ縁に、幾つか摘記すれば

起居　呉越春秋。王行有頃。因得生瓜已熟。呉王掇而食之。謂左右曰。何冬而生瓜。近道人不食。何也。左右曰。謂糞種之物。人不食也。呉王曰。何謂糞種。左右曰。盛夏之時。人食生氏（朱にて瓜と訂さる）。起居（二字朱圏点あり）道

傍。子復生秋霜。悪之故不食。夫差内伝

今按。是謂大便為起居。他書未有所見。（起居の上層に「起居裕按不／特大便小便／示応通」と朱筆書入あり）

大根脚　元周密視聴抄。元係大根脚。今按大根脚（朱圏点）。

毫富意。

饅頭之始　同上（誠斉雑記）。孔明征孟獲。人曰蛮地多邪。用人首祭神。則出兵制。孔明襍以羊豕之肉。以麺包之。以像人頭。此為饅頭之始（朱圏点）。

厠上忌聴杜鵑　異苑。杜鵑初鳴。先聴其声者。主離別。厠上（朱圏点）聴其声不祥。厭之法。当為大声以応之。宋劉敬叔撰

書誌学に関する夢渓筆談からの「活板法」、輟耕録からの「膠礬法」、筆叢からの「印書紙美悪」「雕板之起」等の記事もある。

本書は編成未だ整わざるが如きで、本文丁数の箇所でも触れたが、巻首目録にも「……」巻一以上や、「……」以上巻二、月光読書類不見等傍線部の如き朱書書入が見られる。「博物志。太原……」の箇所には、朱筆にて「一本志下有／云字元文無」とあって、他本との校合が為されていることが分る。体式は、語彙を標記し、出典を示してその言葉の使用された箇所を引き、場合によっては末に按語を加える唐話辞書の趣きもある一種の類書と云ってよかろうか。序末の上層には、遺契に注して「列子説将篇／宋人有遊於／道得人遺契／者帰而蔵之／密数其歯告／鄰人曰吾富／可待矣」と朱書されている。

服部南郭、柳沢吉保の儒臣、宝暦九年没、享年七十七。その稿本・旧蔵書類は早稲田大学図書館に遺蔵され、本書の自筆稿本も存する。ハ〇九―四―一―三

以呂波之伝（尾題「伊路葉伝授」）〔花山院長親〕　写

半一冊　薄様紙

後補栗皮色空押花卉文様表紙（二五・一×一七・八糎）金砂子散しの双辺刷枠題簽に「以呂波之伝」と書す。巻頭朱の〇の後に「以呂波之伝／いろはは高野大師の漢土の字日本／の音うつりやすきをとりて伯英／懐素張旭等か畧菓になそらへて作り／し也……（高野大師に朱引・伯英に朱引し、張伯英と朱書傍記）」と始まる。無辺無界、第一丁裏より以呂波を「篆　隷　楷　行　草　変体仮名　楷書体仮名」の七段四行に書写す。前文字面高約二二・二糎、以呂波字約二〇・一糎。第七丁裏より、朱鉤点に続けて「仮名は草字の書決にして連綿し／て……」と伝授文あり。尾題「伊路葉伝授亜」。全一五丁。朱鉤点・朱引を附す。薄様紙に書写され、見易からんために入紙が施されている。

本書は漢字の音や書体についての伝説で、伊呂波伝書等種々の書名で伝えられる伝花山院藤原長親の伝授書。各字の伝を説く際いろはに標字のため圏点を加える。まま、「大和かんな」に「片仮名ノ丁」、「へ」の字を書き分けて、右傍に「道風書」「宗尊ノ書」等と朱筆の注記が加えられている。漢和の名家の字や説を引き、「別有口伝」等の表記もある。

尾題末の亜字は亜槐の略ででもあろうか。花山院藤原長親は、南朝元中六年以前に内大臣となっている。朝廷を始め、足利義満・義持また大内氏等に儒学・歌道を講じ、伝授書も多い。正長二年没、享年未詳なれど、八十有餘か。ハ〇九―四―二―一

一枝堂考証千典存巻三・四・七附夢笑随筆存巻一　釈了阿

（附）洒落斎夢笑　写　中一冊　薄様紙

焦茶色表紙（一八・四×一二・六糎）海松色題簽に「一枝堂考証千典」、題簽下直に「巻三、四、七」と書さる。各巻頭に「一枝堂考証千典巻之三（四・七）目録／不言勝言一葉右二十八日避慾一葉左／……」の如く、目録各三丁を冠せ、「一枝堂考証千典巻之三（四・七）／江戸　釈　了阿　著／佐渡　本間君恕／江戸　竹内冲天／校（君恕と冲天の下に一格空けて跨行）」と題署す。巻四内題下、江戸・佐渡　本間君恕・江戸　冲天の一二文字墨筆にて線を引き抹消さる。無辺無界一一行漢字二〇字仮名不等小字双行、字面高約一五・〇糎。版心部折山表に「丁附」あり。本文に藍筆にて句点、朱筆にて圏点、眉上に書入、朱の句点・朱引等あり。不審紙貼附さる。切貼訂正・紙継ぎ等も為されている。尾題「一枝堂考証千典巻之三（四・七）終」。巻三―二六・巻四―三三・巻七―三七丁。「山上／書記」「九万楼／蔵書記」「洒竹／庵」の朱印鈐さる。巻四の後に、次に記す「夢笑随筆」が誤綴さる。

扉の如くして「夢笑随筆　弐」と書す。巻頭「夢笑随筆巻之一／洒落斎　夢笑著」と題署し、朱〇の次に「手柄の岡持平の字尽し系図」と小題して本文に入る。双辺（一四・四×九・四糎）有界八行の、白口単黒魚尾墨刷罫紙使用。平仮名交りにて小字双行、系図の吊書部分に朱筆を交ゆ。上層に書入・墨引あり。巻末に朱丸印の中に「天保」「六」と書さる。二七丁。扉に「嘯風斎／蔵書記」の印あり、前者と伝流を一にするものに非ざるべし。天地断裁され、考証千典には一部裏が打たれている。恐らく近代の改装合綴になるものであろう。

考証千典は、例えば「料理」を「晋昼第八十」、「自由」を「後漢昼第十三、風俗通第四、増壱阿含経第卅」、「慰斗鮑」を「大

諸礼集、晋昼」と云ったように、和漢の諸書から博引旁証した類書で、全一〇巻。巻一・二・五・八の本書と同筆、同蔵印を押捺せる本が無窮会に存する。全く漢籍とは関わらぬ「牛若丸衣裳」等の項目も見られる。一例として、回禄の條を引けば

左伝第廿四、（二葉左、服公十八年夏五月）曰、郊人助祝史除於国北（為祭処於国北者就大陰禳火、）禳火于玄冥回禄、（玄冥、水神、回禄、火神、）

引用は漢籍のみでなく、和歌・物語・仏典にも及び、まさに和漢仏兼学とされた撰者に相応しい。了阿本稿㈢に既出。

附綴される「夢笑随筆」の撰者、洒落斎夢笑については未詳。了阿との関係又未詳。ハ〇九—四—三—一　（追記三）

王註楚辞考　〔戸〕埼〔淡園〕（允明）　写（森枳園カ）

大一冊　森枳園旧蔵

縹色布目表紙（二六・六×一八・〇糎）題簽に「註楚辞考全」と書さる。巻頭「王註楚辞考／（隔一行）常陽　埼允明哲夫　著」と題署す。「楚辞詩之流也。……故先儒以為／詞、賦宗。……」と前書あって、「離騒」と小題して本文に入る。無辺無界九行二〇字小字双行、字面高約一九・三糎。要語を摘録して注解考証が施さる。胡粉訂正、朱墨藍三筆の校字書入あり。句点を附す。挿入紙三葉あり。三六丁。巻頭に「森／氏」朱印鈐さる。森立之旧蔵にして、書写も同人の如し。

本書前言に楚辞の提要と共に、撰述の意図と経緯とが述べられているので引録する。

楚辞詩之流也。其為言皆出於忠愛之誠。其旨繾綣惻怛。凄然興感。孤臣孽子慷慨不平之衷。可以遣也。邀雲神。謁帝子。従容婉娩之懐。博洽麗雅之材。饗祭送迎之敬。必足以感鬼神也。故先儒以為詞賦宗。而其調高古。則興象不易尽矣。王逸有章句。趙宋洪興祖有補註。猶未悉焉。及宋中葉。士大夫目朱熹之学為偽学。朱熹遂阨于権奸。不啻如屈原之在楚也故在武夷之際。有感於屈子之辞。先之有晁無咎別録楚辞。廼即晁氏之撰。刪定王洪二家。為之註釈。多所発作者之意。余頃読劉氏所録。傍取之以補定王註。七諫以下晁氏不録。則朱氏不亦及焉。至此全以微意継之耳。従此以往晁氏之選。特別。故不載焉。

寛延二年一一月、京の上柳治兵衛等の刊行した王逸注・洪興祖補注の「楚辞」渡辺樵山書入本につき、本稿㈠で触れた際、楚辞についても略記した。全巻にわたる邦人の注釈書は少いので、簡略なものながら本書も注目される。但し「悲回風」等題名のみである。

戸埼淡園、守山藩儒、文化三年没、享年七十八とも八十三とも云う。ハ〇九—四—四—一

解頤譚　罷癡子　近写（〔浜野知三郎〕）　半一冊

黒色布目空押桜花文様表紙（二四・八×一六・〇糎）双辺刷枠題簽に「解頤譚　完」と書す。巻頭「解頤譚／己斯先生批評　蓑谿　罷癡子戯著」と題署す。戯名、美濃谷出来のせむし男の謂か。単辺（一三・九×九・五糎）有界七行の白口単黒魚尾墨刷罫紙使用、行一七字、句点を附す。二二丁、首尾に一丁宛罫紙ありて遊紙と為す。

全四九話から成る漢文の笑話集で、例によってその幾つかを引けば

蛇入陰

墨水花開、長堤草緑、都人士女、雑沓拾翠、一女子摘土筆、蛇欻入其牝戸、女遽禦之不得、坐号立泣、幾如狂者、衆欲救之而無計、或者視之曰、莫憂蛇必出、言終蛇出、衆挙奇之、問曰、子何以知蛇忽出、或者曰、吾相其面而知之、衆問其故、曰、頰色如桃花、其臭可知、

大童山

有大童山者、長六七丈、行買酒、々家已寝、叩其戸、店老曰、誰也矣叩楼戸者、

仝

逢大童山於混堂、問曰、子疇昔之夜、遊妓館、楽乎、曰何以知吾遊於妓館、曰臍上抹紅彩矣、

称雪

寒風栗冽、砭肌針膚、凍雲襲簷、雪花撲窓、罷癡子擁爐、縮如蝸、命童曰、雪已盛、汝操尺称之、童曰、諾、乃立雪中、右穿之、左刺之、良久而報曰、其深尺有五寸、其広不可量、

柿盗や反魂香の如き、現今でも落咄として語られているものも載る。

漢文体の笑話も白話等の影響もあり、明治初期までかなり盛んに行われた。作者の罷癡子については知る所がない。ハ〇九—四—五—一

漢呉音図補正　岡本況斎（保孝）　近写（〔浜野知三郎〕）

半二冊

白色布目地空押亀甲三手杵文様表紙（二三・五×一六・一糎）双辺刷枠題簽に「漢呉音図補正　乾（坤）」と書さる。表紙には金切箔が散らさる。裏丁匡郭外書脳部下端に10「南鍋弐㊐製」

とある白口単黒魚尾双辺有界一〇行藍刷罫紙三丁を遊紙とす。上巻末と、下冊の遊紙は各一丁宛。巻頭「漢呉音図補正／況斎岡本保孝著」と題署さる。「再刻本ノアヤマリ」（第一丁表）「凡例」（第一丁裏第二丁表）に続いて、第三丁より「第一合／開ト改ムヘシ」と本文に入る。双辺（一九・四×一二・八五糎）有界一〇行の白口単黒魚尾藍刷罫紙使用。罫紙には、裏丁匡郭外書脳部下端に「山城屋版十」とあり。但し巻上第六四―六六丁、巻下第一・一一丁は前述南鍋製罫紙を用う。巻下第九一丁はただ「10」とのみあるも、恐らく南鍋製ならむ。片仮名交り文、小字双行。傍線・圏点が施さる。押紙と、書眉の左右を切込み、内側に折込んだ標識が夫々一個所宛ある。また筆者浜野氏の「知按」の貼紙と、上層への「知按」の按語が、これも各々一個所宛存する。乾坤各九一丁。

本書は、本稿㈡で略解した太田全斎の漢呉音図・漢呉音徴・漢呉音図説の序や凡例をも含めた詳細な補正である。本書序に当る「再刻本ノアヤマリ」に曰く

漢呉音図彫刻ノ後コレカレ訛謬ノアルヲ再訂シテ補刻セラレタル本今世上ニ流布ス開キミルニ其改正セラレテヨクナルモ少カラスト又大ニアヤマレルモ多シコレニヨリ今本ヲ主トシ初刻本ヲ以テ改正シ又太田氏初刊再治トモアヤマレルヲハ孝ノ意ニテ糾スヿ左ノ如シ

「明治九年二月九日改正」とし、見解を改めている所もある。晩年まで倦むことなく考究を続けたものであろう。

況斎、幕府儒官にして和漢に通ず。明治一一年没、享年八十二。なお幕府儒官で親交のあった杉原心斎に与えた自筆一葉が、「〔七雅〕序」中に綴込まれ、本稿㈠に全文を掲げてある。本書は静嘉堂文庫に自筆本が存する。ハ〇九―四―六―二

干禄字書辨証（題簽）〔小島成斎〕（知足）近写（〔浜野知三郎〕）大一冊　薄様紙

朱色表紙（二六・九×一九・三糎）金砂子散しの双辺刷枠題簽に「干禄字書辨証小島成斎著」と書さる。末に「四庫全書総目提要」とある干禄字書解題・「段玉裁経韵楼集云」の段玉裁説・「碑下截断……」の金石粋編からの引用（これのみ朱書）を冠せ、本文に入る。此等は恐らく、もと官版「干禄字書」見返の成斎書入を移写せしものならむ。一丁、無辺無界一六行小字双行、字面高約二二・三糎に書写さる。

本書は恐らく、本稿㈡で触れた国会図書館蔵等の、稠密な成斎書入部分のみを取出して一書と為し、浜野氏が仮に「干禄字

書辨証」と外題したもので、成斎の名づけたかかる書が存する訳ではあるまい。本文部分は大きく空けられた料紙中央を除き、眉上・書脇・欄脚に朱墨そのままに転記されている。句点が施され、小字三五字内外不等。巻末に「文化十四年刊」の原刊記のみ写さる。五三丁、但し第四―六・八・五一丁白紙。これ乃ち書入れの存しなかった葉である。巻末に「石本跋」転記さる。本文巻頭に当る部分に「有烋館／図書記」朱印模写さる。

本書は、掲出の各字につき、古典や銘文・碑文・字書等を博捜して出典を示した細かな考証で、文中「知足云」「知足案」等の案語あることから、成斎の考証であることが知られる。本稿㈡掲出の浜野氏蔵の二点は、成斎書入の移写が本文にとどまり、詳密な考証部分に及んでいないことから、逆に本文部分を除き、眉上や、上層に収まり切らぬ書脇・欄脚部分の書入れだけを、転記したものであろう。国会本と書入れの行格は異るが、極少部分を除いて殆ど出入はない。但し国会本には有烋館の印記はないので、成斎自筆本或いはその移写本が別に存したのであろう。

小島成斎、本稿㈡に既出。ハ〇九―四―七―一

孔子年表　最上〔鶯谷〕（徳内）　自筆　半一冊

黄土色表紙（二三・三×一六・六糎）双辺刷枠題簽に「孔子年表最上徳内著」と書さる。扉の如く、元表紙より切取りし「孔子年表」を中央に貼附。香色元表紙は表紙見返に貼附され、外題を切取りし跡に「孔子年表」と書する題簽を補う。文化丙寅春二月龍渓野中知書于松前旅亭「孔子年表序」二丁を冠せ、巻頭「孔子年表／最上徳内識」と題署す。双辺（一七・九×一三・一糎）有界一〇行、白口単黒魚尾の墨刷罫紙使用。行二〇字小字双行。胡粉や抹消・切貼りによる訂正、押紙・按語、上層や欄脚への「異考云」等小字の細かな書入れが多い。朱の書入れもある。二〇丁、巻頭に「芳山蔵書」の朱印押捺さる。

序に「……最上徳内好学。……乙丑之秋。……公事至松前。旁午之間。校訂孔子年表……」とあり、文化二年の秋、目付遠山景晋を案内し蝦夷に赴き、公事の間に認められたことが識されている。系図二丁に続き、孔子生誕より孔子年七十三までの、諸書より輯め来った年表で、第二〇丁裏には「弟子名数又論／配享／従祀」、裏表紙見返には「孔子年三十四／温故知新通礼示之原明道法之帰則吾師也」の文字が見える。書反古がそのまま使われたものであろう。

最上徳内は蝦夷地探検家として著名であるが、只の探検家に

とどまらず、経学・音韻学に精しく、露語・アイヌ語にも堪能であった。「孝経謹奉進」（上は「孝経白天章」と題さる。但し版本は「孝経謹奉進」と題し、天保三年刊。下未刊）の自筆稿本が、上（乾）は静嘉堂文庫、下は関西大学（玄武洞文庫）に蔵されており、その学的態度が如実に窺われる。天保七年没、享年八十三。八〇九—四—八—一

五雑組掌故存巻六・七・九・一〇〔後半〕・一五　〔北静廬〕写　半七冊

焦茶色表紙（二三・七×一六・二糎）に直に「五雑組掌故第六（九）上（下）」「五雑組掌故第七（十・十五—雑襍に作る—）」と書さる。第一冊の見返に「六人部上下／七人部／九物部上下／十物部／十五事部」。第三冊の見返に「書家　画家　嗜好一癖人」の朱書目録が記され、第五冊巻九下には目録が見返に、第六冊巻一〇には扉「五雑俎　十／物」が表紙裏に貼附され、見返に目録が貼られている。巻頭、内題なく「巻ノ六」と題するのみ。他は「五雑組巻之七」「五雑組掌故巻之九上」「五雑組九下」。無辺無界一〇行二〇字小字双行、字面高約一七・九糎。版心部折山表丁に「丁附」藍筆（第二冊以下墨筆）。巻六上七六、下通一一六、巻七—三四、巻九上五五、下通一一八、巻一〇—四一、巻一五—九〇丁。「三島文庫」「沢氏／文庫」の朱印鈐さる。

本書は五雑組一六巻中のことばを標目とし、その故実・故事・来由を出典を掲げて引用説解せしもの。編成・体式区々にして整わず、未成書の如し。朱点・朱引・朱の校字・圏点・出典を朱で囲う等朱墨書入、藍引・墨引・不審紙・胡粉訂正等あるも、第四冊以下僅少。上層の標目（見出し語）も第二冊より書式異り、小振りとなり、第七冊では本文に入る。第七冊体式他と異り、九行二七字内外、字面高約一八・九糎。第三冊画人・嗜好の項では、版心部折山表上部を朱にて塗抹し、標識とす。

五雑組は、五彩相合する綫に倣え、天地人物事の同類ならざる五者を織りなし、参差錯出せる雑記で、明版の覆刻が寛文元年刊行され、天主教等の不都合な二箇所を改修して印行、後寛政七年後印本が刷出されている。江戸期の百科辞彙的学問の風潮や、考証随筆・雑学的な気風とよく合い、愛好された。

北村静廬、通称家根屋三左衛門、一時古本のせどり等もしたと。別号梅園。嘉永元年没、享年八十四。八〇九—四—九—七

五雑組注釈存巻四・六・九・一一—一六　北静廬（慎言）写　半九冊

砥粉色表紙（二三・五×一六・三糎）綴尋下部に「四（六・九・十一・十二・十三・十四・十五・十六）」と書さる。扉左肩に「北静廬著（巻四のみ）／五雑組注釈巻之四（十一・十四）」或いは「五雑俎注釈巻六（十五）・五雑組巻之九注釈・五雑組巻之十二（十三・十六）註釈」等と書し、その右に朱筆にて「校合仲弼（仲弼九・一二・一三なし、一四は右肩朱筆にてただ「校」とあるのみ）」と書さる。巻頭「五雑俎巻之四注釈」或いは「五雑組巻之六（十一・十二上・十四・十五）」「五雑組巻九注釈下」等と題さる。巻一三・一六は首欠、巻一一は尾欠か。無辺無界一〇行二〇字ほど小字双行二七字ほど。字面高約一八・五糎。巻四・一一（僅少部分）・一二は「一ヲ」等と、標目語の五雑組刊本丁数を上層に標記。以下は本文中に「某一ヲ」「一ヲ某」等と朱書す。巻一三の第一〇八・一〇九丁は単辺（二〇・三×一三・〇五糎）有界九行、下象鼻に「恬養室」と刻する藍刷罫紙使用。文章は一〇七・一一〇と接続する如し。ままに朱墨の訓点・校字・訓仮名・句点（藍もあり）・朱引・墨引が施され、巻一二はほぼ全巻にわたって朱墨の句点が附されている。胡粉・切貼りによる訂正・不審紙あり。

本書も各巻体式整わず、未成書の如し。按語や引用書名の標示の仕方もまちまちで、取上げられる項目も必ずしも刊本の丁数順でなく前後している。料紙も薄様も交り、区々である。巻九・一三・一六は一見別筆の如く、前記掌故と同筆か。本書には僅に片仮名交りの箇所がある。上層二方を切り、中に折込んだ標識があり、料紙より長大なので天地切裁されたことが分る。巻末に「大正拾年八月壱日（青色スタムプ）／九冊（万年筆）」と識さる。巻四―八五、巻六―一〇六、巻九―六八、巻一一―一〇四、巻一二―九〇、巻一三―一一〇、巻一四―七二、巻一五―九九、巻一六―五九丁。

本書は、標目に立てた単語の下に「をおき、その下に諸書から博引旁証した五雑組語彙の注解を施したもので、出典を記し、ままに「慎言云」「慎言按」等の按語を加えている。この一連の五雑組注は、何如に百科辞彙風の学が好まれたかを知る好個の例となる。世間称して、静廬を雑学者と云うが、物の本によるに、雑とは物を雑え、徳を選びて是非を辨えるを云うと。蓋し狭隘なる一専門領域にのみ拘泥せざる謂であろう。なお本注解の底本となったのは、「又四十二ウ麗廸峩」等の記載から、修印本であることが判明する。寛文刊本では当該箇所は巻四の第四二丁であり、修本では「又四十二」として改刻し、以下の丁

附が一丁宛繰上っており、本書底本の丁附と一致する。八〇九—四—一〇—九

五雑組小撮一六巻（欠巻九・一〇・一五）〔北静廬〕

写　半三冊

砥粉色表紙（二三・六五×一六・三糎）に直に「五襍組小撮　上（中・下）」と書す。見返に「一二天三四地三四下巻ニモ出七下巻ニモ出八同上（天・地朱書）／和板抹去二節／○一天○二天○三地○四地○五人●六人●七人●八人／（前行●六以下に並べて）○上下○単　単／●九物●十物●十一物●十二物●十三事●十四事●十五事●十六事／（前行●九以下に並べて）○上下○単　単上下　上下　単○単　単」とあり、左下端に「●掌故白藤占恒在本印／○全本騰（ママ）写之印」と注記さる。傍線部藍筆、天地人物事上下単朱筆。白藤は本稿(一)既出の鈴木氏か。第二冊見返に「三四地五六上下七八人○七追加末ニ」（地人朱筆）、第三冊見返に「十一　十二　十三　十四　十六」と書さる。巻頭「五雑組巻之一（—十六）」「五雑組小撮／第五巻」等と題さる。双辺（一九・四×一三・三糎）有界一一行、白口単白魚尾の墨刷罫紙使用。行二五—二八字不等小字双行。版心下象鼻表に「巻数」、第三冊のみ巻数の下に各巻毎の丁数を記す。上冊巻七、中冊巻五、下冊巻一二以下の各巻頭版心折目上部を朱で塗り、標識とす。朱墨句点、朱の校字・圏点、朱引・墨引あり。但し下冊には朱筆はない。不審紙・胡粉による訂正あり。中冊裏表紙見返に「静廬通称三右ヱ門／作五雑組掌故十巻」の貼紙あり。上冊巻一—八、三〇丁。但し巻五・六なし。中冊巻三—八、五一丁。末に「和版五雑組抹去文・七追加・博識附捷悟」計八丁を含む。下冊巻一一—一六、五八丁。但し巻一五なし。巻頭に「沢氏／文庫」朱印押捺さる。

本書もまた、五雑組中の語彙を各書から引例し、按語を附しなどした考証であるが、巻次前後し、中冊途中より項目たるべき語を標記するが、少部分で終っている。本稿で紹介した五雑組の解注三点は、各々未斉整の稿本で、且つ欠佚があり、序跋もないので、三者の関係は明らめ難いが、同一巻を比較するに、掌故と注釈とは序次は異るものの、同項目の記載はほぼ一致する。それに対し「羅公遠六ウ」の如く、小撮にはその出典のみを識し「酉陽雑俎……与〔太平〕広記所載、大同小異、」とあり、注釈にはその全文を引く等小撮とは異る箇所がある。概して小撮は簡、掌故・注釈は詳しい。同一部分が少いけれども、小撮は極く初期の覚で、段々と得るに従い掌故と為し、それをより

増補整斉したのが注釈と見てよいようである。終生増補を重ね、改編の筆を措かなかったものであろう。

椹斎の没後、渋江抽斎が「箋注和名抄」の稿本を整理した際の覚書を、川瀬一馬氏が「書誌学」第四巻第六号に紹介しておられるが、その中に「中浄書出来タラバ一閲ヲ請ベキ人々左ノ通、岡本況斎・前田夏蔭・小島五一・家根ヤ静廬」と見える。

八〇九—四—一一—三　（追記四）

古梓跋語（最終本）附追加　西村兼文　近写（浜野知三郎）　大一冊　薄様紙

青緑色表紙（二六・五×一九・〇糎）双辺刷枠題簽に「古梓跋語　全」と書す。「古梓跋語目次／緒言一……月庵和尚法語五三／倭玉篇／全／（隔二行）古梓跋語追加目次……文選五八／以上」とある目録一四丁を冠せ、中扉「最終本／古梓跋語　西村兼文著」。巻頭「古梓跋語」の次行、明治二十九年七月　日南都之客舎に西村兼文　誌「緒言」六丁を置き、再び「古刻跋語」と題して、「一成唯識論　十巻」より「一明徳記　活版　二冊」までの古刊本の刊語跋・奥書等を輯録す。その後に「月庵和尚法語」と「倭玉篇」二部、計三点の補記一葉挾込まる。緒言は無辺無界一三行、字面高約一九・九糎。跋語同無辺無界一三行、字面高約一八・八糎。再び中扉「古梓跋語追加　西村兼文著」あって、「古梓跋語／追加」五丁。跋語本文四六丁。

本書は、もと明治一五年に撰述された「古梓一覧」の附録で、之のみを増補改訂し、同二三年の序を附し「好古十種」中に収められた。更に没年の明治二九年（一一月一日没）迄補訂増益し、田中光顕伯の補遺分をも併せ、稿成ったものである。一四二部附一部追加一五部の古刻跋語が収められている。「日本書誌学之研究」「入門講話日本出版文化史」所掲川瀬一馬氏蔵自筆本の写真と比するに、その忠実な影写である。「予カ多年実閲する処之後叙に子爵田中光顕君之補遺せられたるものを併せて爰に掲く」と緒言にある如く、南都春日版から古活字版迄の刊語跋や奥書類を彙輯したもので、浜野氏が兼文の押紙等による訂正もそのままに影写した著者最晩年の最終稿本である。田中光顕伯の遺蔵書を蔵する高知佐川の青山文庫本と比するに、大いに異る。本邦初の日本印刷史である朝倉無声著「日本古刻書史」は、本書に負う所が多い。

本書緒言に、百万塔陀羅尼や興福寺北円堂所蔵版木についての記述があるので引いておく。

寺伝には銅石木三種の印板なりといふ数百種を熟視すれは

其版式銅の如きあり石の如きはあらす木版と見認めらるゝは殊に多しされと百万の多数なれは工手に巧拙あり書に佳と俗の相違甚敷あり

今南都興福寺北円堂之中に二千六百余枚之古版木あるを予此頃取調へたる処左之奥書を刻せしを現出せり

一成唯識論述記巻第九／……

建久六年乙卯八月廿九日　僧　堯盛

本書は巻子本・帖装本・冊子本の形態を、巻・帖・冊を以て区別しているが、本書で見る限り、帖装は承元四年四月八日刻「往生要集」、冊子体は弘亥中夏（弘安一〇年八月）「禅門宝訓集」が最も早い。

西村兼文、明治二九年没、享年六十八。もと本願寺の寺侍、考古の癖あり、古書贋造に手を染めしことありと。八〇九—四—一二—一

歳寒堂遺稿三巻　北條霞亭（譲）撰　同〔悔堂〕（退）校　筱崎小竹閲　写（〔北條悔堂〕）　半三冊（仮綴）

筱崎小竹・落合〔双石〕（賡）書入本

本文共紙表紙（二四・九×一七・五糎）に直に「定本／歳寒堂遺稿一（—三）」と書さる。友人頼襄撰「墓碣銘」二丁、末に「附載／行道山行記」とある「歳寒堂遺稿目録」一丁を冠せ、巻頭「歳寒堂遺稿巻之一（—三）／福山　霞亭北條先生著　男退校／浪華　小竹筱崎先生閲（福山……と並べて）」と題署す。第二・三行は、もと「福山　北條譲子譲著／男　退輯」とあり、その上に貼紙訂正さる。無辺無界一〇行二〇字小字双行、字面高約一七・九糎。墨筆訓点・圏点、朱筆校字・圏点が施され、ま朱墨の句点が附さる。また眉上に小竹と双石の朱評書入れらる。但し双石評は巻一のみ。切貼による訂正や貼紙が施されている。尾題「歳寒堂遺稿巻之一（二）」。末に甲子十一月亀田興撰、文化乙丑夏五　皆川愿題の二跋を附する「行道山行記」を、「歳寒堂遺稿附録」と題して収む。八丁。なお附録次行以下に、訂正分とも巻頭と同じき撰者名題署二行あり。「歳寒堂遺稿巻之二／北條譲子譲著　子退輯録」等とある書反古を、表紙・裏表紙の中貼りとす。巻一—二八、巻二—四一、巻三—四四丁。

本書は、鷗外の史伝で知られる福山藩儒北條霞亭の遺稿を、息男の悔堂が整理編修したもので、巻一詩古今体二六二首、巻二同二一五首、巻三文—序九首・記五首・説二首・題跋七首・雑著四首・墓誌銘四首・祭文一首と附載の行道山行記より成る。

文中小竹自筆の評や「此詩／ケツル」や「三原観梅之詩コノ間ニ入申カ」等の編成上の貼紙が、上層・欄脚に為され、新たに「コノ間へ嵯峨樵歌ノ詩ヲ入レ申候」「三原観梅之詩コノ間ニ入申候」等、それらに応えた編纂者の貼紙が施されている。尚後掲の近写本（八〇九―四―一三―二）では、小竹の語句の改訂や刪削通りに筆写されているが、入申た筈の詩は書写されていない。「湊川楠公墓下二十韻」は、貼紙の上に「楠公墓下作二十韻」と題し、全面改訂が為されている。

巻一末に

先稿捧読餘芳在詩不覚終巻蓋其所宗法在浣花輞川襄陽蘇州之間諸体兼善而於五（七と訂正）言近体七言小詩尤見長其佳者深静淡遠往々味在絃指之外典近人所作大不同広瀬淡窓独可相伯仲餘子何足直哉前是五十年廉熟納交昕夕共筆硯先生為人和而荘温而潔少所称許裯人広坐独称余為天下士雖不敢当私心喜以為得真賞識不幾判袂辞去天各一方其後先生祇役罹疾歿於江戸福山邸徒然遙望痛悼而已余雖耄矣身幸強健仗剣孤征再訪茶山師旧廬先生即世已久矣（上記七字見せ消ち）先生令嗣悔堂出先稿使余評点之余何人可猥加筆哉顧余得知於先生最深矣余而辞之誰復任責者於是不自揣敢加鄙見汚峨大篇只酬知己之万一耳高明取捨之可也

万延元年歳在庚申桐月十七日識於夕陽村舎之西寮

日向　辱契　落合賡

の朱筆識語あり、本書編纂の一端が窺われる。息男悔堂が、遺稿上梓のため、当時流行していた諸家評入の刊行ともすべく、或いは語句の改訂や編纂上の注意を聴くべく、茶山の廉塾で共に机を並べた双石や、浪華の儒者で詩人でもあった小竹に評閲を求めたものであろう。校訂・編纂上の指示を記す朱墨書入が多い。しかし本書は未刊に終ったようである。次掲の一冊と併せ、同じ函架番号が附されている。

北條霞亭、文政六年没、享年四十四。八〇九―四―一四―四

歳寒堂遺稿　巻之三　北條霞亭（譲）撰　同〔悔堂〕（退）校　筱崎小竹閲　近写　半一冊（仮綴）　薄様紙〔森鷗外〕附箋書入本

本文共紙表紙（二四・一五×一六・八糎）に直に「定本／歳寒堂遺稿三／ノ二」と書さる。前掲の複本の意ならむ。巻頭「歳寒堂遺稿巻之三／福山　霞亭北條先生著　男退校／浪華小竹筱崎先生閲」と題署さる。無辺無界一〇行二〇字小字双行、字面高約一九・七糎。訓点・朱校字あり。尾に「歳寒堂遺稿附

録／福山　霞亭北條先生著　男退校／浪華　小竹筱崎先生閲／行道山行記」八丁あること又同じ。本文四四丁。

前掲本巻三のやや粗い臨写で、行格前に同じく、「　」の記号を附し「以下刪」等と朱書される部分も、そのまま書写されている。こうした箇所は後掲一三番本では、全て朱書の指定通りに直して写されている。本書は後掲書より、更に新しい写しである。

眉上貼紙に「文化辛未三月」等、作成の年次を記したり、「比レ到ニ洙川ニ」の欄脚に「除川カ」等と附箋をしたのは、史伝「北條霞亭」執筆のため、浜野氏から資料を借覧した鷗外の筆で、次掲本にも見られる。鷗外は、既に小竹の附箋等も貼られ、双石の書入評等ある悔堂手写本かと思われる本でなく、近写の複本によって稿を成したことが分る。

浜野氏と鷗外兄弟との関係は、本稿㈠とその前言にもいささか触れる所あったが、北條霞亭執筆に当って、鷗外の基本資料となったのは、次掲本と合せた本書三冊と、浜野文庫蔵の霞亭関係書簡約六〇通、的矢の北條家に残る尺牘約二百餘通であった。因みに霞亭の尺牘類は尾形仂氏が整理され、成城国文論集第一三号に、目録が収められている。

本書、前掲書と同一番号が附せらる。八〇九―四―一四―四

歳寒堂遺稿二巻　北條霞亭（譲）撰　同〔悔堂〕（退）校
筱崎小竹閲　近写　半二冊（仮綴）〔森鷗外〕附箋書入本

本文共紙表紙（二四・九×一七・三糎）に直に「歳寒堂遺稿一（二）」と書さる。「墓碣銘」二丁、「歳寒堂遺稿目録」一丁あること前掲本に同じ。巻頭「歳寒堂遺稿巻之一（二）／福山霞亭北條先生著　男退校／浪華　小竹筱崎先生閲」と題署す。上層に「文化癸酉元日／鍋屋町（年紀の右下）」と、作年住居の附箋を識すは鷗外の筆。無辺無界一〇行（各巻頭一一行）二〇字小字双行、字面高約一八・〇糎。墨訓点・朱筆の句点・校字あり。巻一―二七、巻二―四〇丁。

本書は、ほぼ小竹の前記改訂の通りに書写された近写本で、削るべきは削られているが、入るべきは入れられていない。蓋し底本に「入申候」の表記のみで、実際には編入されていず、分らなかったものであろう。巻一では双石の朱訂を、朱筆にて傍記或いは本行の墨書の上に重ね書きしている。

鷗外の附箋は、大体が先に挙げたように作成年次や作成場所についてのものであるが、「長考」に「長老カ」の如く誤字を

訂したり、人名の他書との異同を注記したりしている。「不忍池旗亭有懐亡友木小蓮」の七絶の欄脚に「不忍の池の蓮の物言はゝいさ語りなむしのふ／むかしを／六月十五日ノ書ニ『先日』トアリ」の朱筆。「篠崎小竹示歳除詩卒爾和答」七絶の小字双行自注「自注云僕明年四／十二。而正／月閏故云。（句点朱筆）」の欄脚に「正月閏ナルハ壬午ナリ行状二種ニヨレバ四十三ナル／筈也何故ニ四十二トスルカ不審也且詩ト註ト『去今明』矛盾ス」等と墨書の考証が為されている。ハ〇九―四―一三―二

周尺説　森〔椹庭〕（約之）　安政四年一二月跋刊（福山森氏聯腋書院）木活　半一冊

後補茶褐色表紙（二四・四×一五・六糎）双辺刷枠題簽に「周尺説　森約之　完」と書さる。本文共紙表紙左に直に「周尺説」と木活にて刷らる。元仮綴か。巻頭「周尺説／許慎（末画を欠く）説文解字云寸十分也人手郤一寸動脉謂之／寸口从又从一／又云尺十寸也人手郤十分動脉為寸口十寸為尺／尺所以指尺規矩事也……」と始まる。単辺（一六・六×一〇・一糎）無界一一行二〇字、白文。版心、小黒口単黒魚尾、中縫に「周尺説丁附」、下象鼻に「聯腋書院擺刷」と植版さる。末に一格を低して案語を附し「頃熟復説文／文義始悟周制尺度昭然可指従来紕繆一時帰／正不亦愉快乎丁巳臘月森約之書」と。巻末「福山森氏／臧版之記」の茶印押捺さる。全巻入紙の上線装に改めらる。紙面高約二二・六糎。全三丁。

約之案語に云う。

案周世之制以人手後動脉定為一寸謂之寸口十分之乃為一分十合之乃為一尺又以中男子両臂自中指頭至掖下之度正有周尺之八尺名之謂尋又以中婦人手自中指頭至掩後横文之度正有周尺之八寸名之謂咫故許氏云周制云周尺也云周制皆以人之体為法是也

先儒皆以為周漢同尺無有異制於是以建初銅尺即為周尺故於説文之言未能明晰段氏注亦属牽会今清称為多鴻儒而皆未有知真（末画を欠く）周尺者何也

身度尺に触れること多く、活字は実・真・慎・殷等の末画を欠いたものを使用している。

森約之、椹園立之の一人子にして、明治四年急逝、享年三十七。貰い物の押鮓に中り、三日苦しみて死すと。約之父子の著作や書入本は浜野文庫にも数部を蔵し、前稿(一)(二)に既出。ハ〇九―四―一五―一

追記

一、四点を刻した標識は、各巻頭・巻三上・四末等にもある。なお標記されている韻目は平水韻の平声のそれであろう。

天正廿年初渡之年とは、秀吉の朝鮮出兵時、所謂る壬辰倭乱・文禄の役の小西行長隊のことで、恵雄もこれに随行したものであろう。恵雄については今知る所ないが、当時易を学んだ足利学校出の僧侶等、易占や外交また文書製作のため、文官的な役として武将に重用されていた。

二、本書は第四一丁表末行「一　サレハ白キ系(ママ)ノソマン事ヲカナシミ道ノチマタノワカレン事ヲナケク」のカナシミの四字が脱落している。古活字本には、屢々こうした文字の脱落や差換え、切貼による印字訂正や墨筆の誤植訂正が見られる。

三、考証千典には、やや後次と思われる墨句点・訓点等を附した書入も見られる。

なお無窮会本（巻八別筆か）は自筆と著録されるが、文中「安政四（五と墨筆にて訂す）マデ一百十四（五と墨筆にて訂す）年」等の本文と同筆の朱書入等から見て、後代の写本とした方がよさそうである。

四、「五雑組翼」と題された自筆本一二八丁半一冊が無窮会に存する。内題下に「随見而録故不分部次亦錯乱」と。